Bobo Lo

Axis of Convenience: Moscow, Beijing, and the New Geopolitics

(London: Chatham House; Washington, D.C.: Brookings Institution Press, 2008),

pp. xii, 277.

山 添 博 史

(防衛研究所教官)

YAMAZOE, Hiroshi

(Research Fellow, National Institute for Defense Studies)

現代国際関係の研究において、中国とロシアの関係は、地政学的に重要な非西欧の2つの国家の関係として重視されてはきたが、包括的な研究はそれほど多くない。英語圏でも、中露関係が米国主導の西側秩序と別の軸として大きな勢力を持ちうると一般に考えられる一方で、その具体的な中身についての検討はあまり盛んではない。

そのような中、最近の中露関係研究文献として重要なのが本書である。著者のボーボー・ローは、華人系オーストラリア人で、1995年～1999年にモスクワの豪州大使館で勤めた外交官であった。近年はロシア政治・外交研究で活躍しており、カーネギー・モスクワ・センター、英国王立国際問題研究所（チャタムハウス）を経て、現在はロンドンの欧州改革センター（CER）に勤務している。英語、ロシア語、フランス語を用いる。著書に *Russian Foreign Policy in the Post-Soviet Era: Reality, Illusion and Mythmaking* (Palgrave Macmillan, 2002) などがある。ローは冷戦後ロシアの外交政策の理論的背景の研究を通じ、ロシア外交の主要関心である対欧米関係も扱ってきたが、しばしば対中国関係についても研究しコメントなどを発表してきた。

本書は中露関係を「便宜の枢軸」(axis of convenience)と呼び、両国が各分野における利害に応じて協力を進め、あるいは摩擦を起こしているさまを叙述する。過去の数十年間に深刻な対立関係にあった両国が現在の関係改善に至ったことを評価し、両国関係は不一致を認識しながらも利害が共有できる場面では協力する「通常の関係」と位置づけるが、通読してみると両国関係の限界の指摘が目立つ。ローのこれまでの数々の研究報告でも、中露は西側に対して強固に結束する危険性があるという議論を否定し、両国は利害関係上そこまでの関係を望まず、それぞれ西側との関係を優先していると主張することに重点がある。

本書の構成は以下の通りである。

- 1 Cooperation, Ambiguity and Tension
- 2 The Burden of History
- 3 Strategic Partnership—Image and Reality
- 4 The “Yellow Peril”—Engagement in the Russian Far East
- 5 “Peaceful Rise” and the Shifting Sino-Russian Balance

6 Cooperation and Competition in Central Asia

7 East Asia—Arena of the Great Powers

8 The Geopolitics of Energy

9 The Grand Chessboard Revisited—Russia, China, and the United States

10 Conclusion—From “Strategic Partnership” to Strategic Tension

第1章は導入として、上記の全般的議論をもって「便宜の枢軸」を定義し、第3章以降で扱う多様な側面を紹介する。第2章では主に1950年代以降のモスクワと北京の関係史を叙述する。ローは両国指導者の個性を重視しつつも、より根本的な不一致、すなわちモスクワが社会主義の盟主として振る舞い、北京が従属的地位を受忍できなかったことなどを指摘する。1969年の武力衝突は両者に長く残る衝撃であり、ロシア側に「黄禍論」の恐怖、中国側に「帝国主義モスクワ」への敵意を根づかせた。

第3章は「戦略的パートナーシップ」を議論する。2001年の中露善隣友好協力条約を紹介し、「パートナーシップ」の定義が曖昧であることを示す。この章ではロシア側と中国側のパートナーシップ認識を詳述しており、「便宜の枢軸」を最も中心的に扱っている。

第4章はウラル以西のロシアとかなり異なるロシア極東地域を扱い、そこでの中国人流入問題を論じている。政治家がよく口にする数十万人の極東への中国人移民というのは、統計上の根拠に乏しく、誇張されたものであると評価（p. 60）する一方、ロシアでのこの恐怖意識は根強く、深刻な問題であることは変わりないと述べている。問題は中国人移民の数でなく、地域経済への打撃であるという。沿海州知事ナズドラチェンコやハバロフスク地方知事イシャエフなどの地域政治家は、この問題を利用して北京とモスクワを非難し、政治的求心力強化に利用した。

第5章は鄭必堅の「和平崛起」（平和的台頭）論に言及し、中国の台頭に焦点をあてる。ローは、中国の成長は著しいが、戦略的にロシアを脅かすのは近い将来には考えられないと評価する。中国軍の近代化やその運用は完全というにはまだまだ遠く、モスクワは中国の重要拠点に対する反撃力を十分持つというのである。ロシアから中国への武器輸出について、著者はこれまで二国間関係の発展に寄与した点を強調している。2007年に契約された武器移転は完了していないことも指摘しているものの、著者は全般的には両国関係は武器輸出や合同軍事演習について良好と評価しているようである。しかし実際には、モスクワはインドより若干性能の劣る戦闘機しか中国に輸出していないし、新規契約は近年成立しておらず、2009年末に契約交渉が行われたものの、この分野の関係はすでに停滞局面にあるとも評価できる。著者は、ロシアにとって中国の台頭の脅威は、軍事的劣勢ではなく、中国の国際環境における存在感増大にともない、ロシアが考慮されにくくなるということだと指摘する（p. 89）。

第6章は中央アジアにおける中露関係で、上海協力機構（SCO）の言及も主にここにある。ロシアはこの地域でロシア帝国以来の安全保障分野の優位を確保しており、中国は今のところそれに挑戦することなく、経済分野での中央アジア各国との関係強化に集中している。しかし両国が影響力拡大を目指すにつれて、対立が顕在化する可能性を著者は指摘している。9・11テロ直後、ロシアが反テロ国際協力のためにアメリカに急接近したものの、やがてロシアの貢献に対する米国の態度に不満を持つようになり、中国との協調路線を再び強めた。これに対し中国は、当初ロシアが断りもなく中央アジアで米軍駐留を認めるなどの動きに当惑したが、それをもって関係を荒立てず、結局中国に有利な協調関係を取り戻したと著者は指摘し、ここで

地域を超えた論点も扱っている。

第7章は、伝統的パワーポリティクスの中東・北アフリカ地域としての東アジア地域を扱う。著者は地域の主要国として米国、中国、日本を挙げ、ロシアはそれほどの影響力を持たないが存在感を示して参与していくことが、ロシアの東アジア外交の主要方針であるとする。ロシアは中国を牽制するためというより、中国への過度の依存を避けるために、日本などとの関係を進展させ、地域構造の多角化を目指しているという。

第8章はエネルギーの地政学である。エネルギー安全保障といっても、ロシアは輸出先、中国は輸入元を安定的に確保するという全く異なる課題をもつ。ロシアは顧客がなければ成り立たないという脆弱な立場のため、信頼できる供給国としての評判を守るための抑制が働いていると著者は指摘する。パイプラインの問題については、やはりビジネスの側面よりも、中国や日本がからむ政治・外交の側面を中心とした叙述となっている。

第9章はブレジンスキの議論を援用し、ユーラシアをめぐる米中露の三国関係を扱っている。第10章の結論では、「便宜の枢軸」の議論をまとめたうえで、長期シナリオを5つ挙げて、そのうち「戦略的緊張」シナリオの根拠が最も多いとしている。すなわち、両者とも衝突のリスクは避けるものの、利害の不一致は顕在化しつつ、可能なビジネスのみ継続するというのである。

全般として気づかざるを得ないのは、中国研究としての水準が、やはりロシア研究としての水準ほどではないことである。英語の中国研究文献はいくつか参照しているが、もう少し根拠が欲しい箇所に研究文献や一次資料の英訳などが利用されていないのは残念である。とはいえ、中露関係といっても両者ともに同等の重みで扱う一貫した研究は實際上困難で、著者ローの場合ロシア外交を主軸に置いている点是非難にはあたらない。例えば、ロシア外交研究に取り組んできたローが中国台頭問題を扱っている第5章は、ロシア研究者にとっては有益な知識であろうし、中国研究者にとっても価値のある視点となりうるのではないだろうか。日本に関する叙述についても、日本人としては疑問に思う箇所はあるが、日本研究文献や日本人研究者のコメントを援用しており、大筋としては無理のない水準になっていると思われる。

また、重要と思われる指摘にも、注が不足していたり、一次資料や専門研究文献から遠いソースを用いていたりする箇所が目立ち、根拠づけに不安が残る。例えば、チェチェン紛争におけるロシア連邦軍のパフォーマンスがよくなかったと論じた一文 (p. 75) のソースは、プーチンの発言である。前述の、9・11 テロ直後のロシアの対米姿勢に困惑する中国の立場を叙述する数段落においては (pp. 95-96)、冒頭にプリマコフの著作を参照する注が1つあるだけである。

なお、同分野で最近出版された英語研究文献としては、James Bellacqua ed., *The Future of China-Russia Relations* (University Press of Kentucky, 2010) がある。これは、戦略的パートナーシップ、経済・エネルギー問題、二国間国防関係、東アジア地域イシューのそれぞれについて、中国研究者とロシア研究者が執筆しており、両側の視点が俯瞰できる。これに対しローの著書は、中国研究の成果はそれほど入っていないものの、ロシア研究として一貫してまとまった研究であり、中露二国間関係の多様な舞台、すなわち国境地域、中央アジア、東アジア地域、さらにグローバルな国際政治・経済の場のすべてを詳述してまとめた、価値の高い著作であるといえよう。